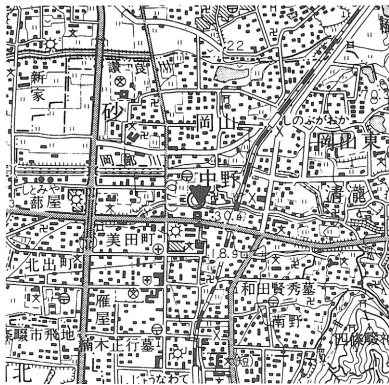


大阪・<sup>なかの</sup>中野遺跡

- 1 所在地 大阪府四條畷市中野本町
- 2 調査期間 一九九一年(平3)二月～一九九二年一月
- 3 発掘機関 四條畷市教育委員会
- 4 調査担当者 村上 始
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 古墳時代～室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(大阪東北部)

中野遺跡は、生駒山系から西へ派生する段丘の西端から平野部にかけて所在し、東西八〇〇m南北五〇〇mの範囲が古墳時代中期から室町時代までの集落跡として周知されている。今回の調査は、四條畷市役所東別館新築工事に伴うもので、調査面積は七四八㎡である。検出した遺構は、掘立柱建物・土坑・溝・井戸二基などである。木簡は、そのうち一基の井戸内に設置され

ていた曲物である。

井戸の掘形は直径約三・三mの円形である。井戸枠の形態は、一辺約一mの正方形になるように、残存長約一・三m幅約一五cm厚さ約〇・五cmの板材数十枚を縦方向に立て、それらの押さえとして角材を支柱や横棧木として三段以上組んだ方形縦板型である。井戸底の中心には曲物が一段設置されており、その曲物に墨書が施されていた。

井戸内からは、土師器皿・瓦器碗・青白磁合子蓋・砥石・須恵器練り鉢などが出土した。いずれも一二世紀末頃から一三世紀前半頃のものと考えられる。井戸以外の遺構からの出土遺物としては、緑釉陶器・黒色土器などの土器類の他、溝から出土した銅製巡方、長年大宝・明道元宝などがある。

### 8 木簡の釈文・内容

(1) 「如月廿日

應保二年」

径505×高230×厚5 061

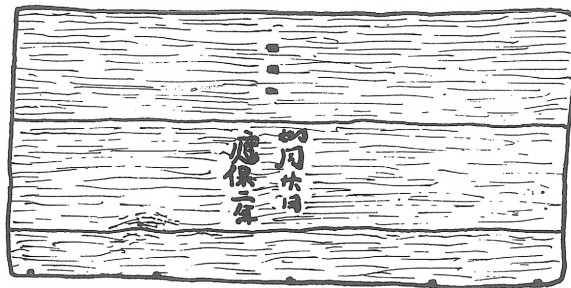
檜材の曲物で、墨書は側板の外面に書かれている。下端部に直径二mmの円孔が等間隔に開けられていることから、蒸し器などを転用したものと考えられる。應保二年は一六二二年にあたり、遺物の年代から考えて、井戸枠に転用される前の墨書であろう。

なお、釈読及び赤外線写真撮影にあたっては、奈良文化財研究所

の渡辺晃宏氏、中村一郎氏のご協力を得た。



(部分)



(村上始)